



政治と宗教 : イタリア人民党の場合 (1919-1926年)

村上, 信一郎

(Degree)

博士 (法学)

(Date of Degree)

1982-09-22

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲0371

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1000371>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	むら かつ しんいちろう 村 上 信一郎 (大阪府)
学位の種類	法 学 博 士
学位記番号	法博い第10号
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位授与の日付	昭和57年9月22日
学位論文題目	政治と宗教

—イタリア人民党の場合(1919-1926年)—

審 査 委 員	主査 教授 西 川 知 一
	教授 犬 童 一 男 教授 五百旗頭 真

論 文 内 容 の 要 旨

本論文「政治と宗教—イタリア人民党の場合(1919-1926)—」は、イタリア人民党Partito Popolare Italiano という宗教政党の構造とその歴史とを対象として取上げたものである。イタリア人民党は1919年第一次大戦後の危機の中で成立し、1926年ファシズム体制確立とともに消滅したイタリア史上初のカトリック政党である。イタリア王国の成立以来、ヴァチカンの指令(いわゆる《ノン・エクスペディト》)によって国会選挙への参加を拒否し続けてきたカトリシズムの世界は、約50年ぶりに1919年始めて国会選挙に参加することとなったが、その政治参加へのチャンネルを提供したのがこの人民党であった。そして人民党はいきなり100議席を得る大政党として出現し、第一次ムッソリーニ内閣にいたる第一次大戦後のすべての内閣に入閣することとなった。その意味で人民党はイタリアのカトリシズムにとっても、また戦後イタリアの政治過程にとっても、きわめて重要な意味をもつ政党であった。

本論文は、三部に分れているが、まず第一部は、人民党の成立過程とその組織構造との分析に当てられている。序章では同時代の歴史家サルヴェーミニの人民党観を紹介することにより、この政党が当時の歴史的文脈の中でどのような期待と課題とを担っていたのかを明らかにしている。次いで一、二章では、人民党成立に至るまでのカトリック運動の状況を分析し、19世紀中葉以来のカトリック運動の歴史をのべたあと、第一次大戦中におけるカトリック一般信徒全国組織《カトリック・アクション》の再編とその後人民党の創設者となるストゥルツォL. Sturzoの個人的ヘゲモニーの確立過程を解明し、ストゥルツォを中心としてやがて人民党が成立してゆく過程をのべている。

三、四章は、この人民党の組織構造の分析に当てられ、とくにヴァチカンの指導を受けないという

意味での非宗派性 *aconfessionalità* という問題とカトリック系の貴族、資本家から農民、労働者にいたるいろいろの社会層にまたがるという意味での階級複合性 *interclassismo* という問題を基軸として、人民党の基本的な性格が分析されている。そして、この政党の実質的な支持基盤をなしていた《カトリック・アクション》とこの政党に大衆運動としてのダイナミズムをもたらした小農、とくに折半小作農の運動との構造的矛盾が明らかにされている。四章における第一回党大会の分析は、こうした点を大会における党内諸潮流の動きを通して具体的に解明したものである。

第二部は、第一次大戦後の政治過程の中に人民党を位置づけ、人民党のかかえる諸問題を年代記的に解明しようとしたものである。一章の「戦後危機論」は、従来の社会党＝共産党サイドの戦後革命論を批判的に検討する中で、第一次大戦後の社会変動のもつ意味を客観的に分析し、とくに政治・議会の変化という展望の下に人民党成立の意味を考察している。二章は、人民党の組織構造が第一次大戦後の人民党自身の主張にもよる比例代表制の採用と緊密な関連をもつものであったことをまず明らかにしている。そして、1919年選挙の分析の中で地域的な支持基盤の性格と社会構造上の特色をも浮彫りにしている。さらに、三、四章は戦後の具体的な政治史（内閣史、議会史）の中での人民党の行動様式を解明し、人民党が戦後の歴代内閣とどのようにかかわっていったかを明らかにするとともに、それと党内諸勢力のヘゲモニー争いによる人民党のダイナミズムとの関係を具体的に示そうとしている。とくに四章は、1920年の地方選挙と1921年の国会選挙を詳細に分析することにより、比例代表制の採用されている国会選挙とまだ採用されていない地方選挙とでは諸勢力の現われ方が異なることを示し、人民党内のヘゲモニー争いを具体的に示すとともに、二章で述べられた党構造と選挙制度との強い関連を改めて強調している。

第三部は、ファシズムの権力獲得にいたる政治危機が人民党の内部構造にどのような影響を与えたか、さらには、ファシスト体制成立後、人民党とヴァチカンとの関係がどのように展開されたかなどの問題を主題として、人民党とファシズムとのかかわり合いを論じている。一章では、農村ファシズムの嵐を背景とする政治危機の中で、人民党やその他の既成政党には、ファシズム以外のいかなる選択肢がありえたかを具体的な政治過程をたどりながら明らかにし、結局ムッソリーニ内閣の成立を許さざるをえなかった過程が描かれている。二章は、ファシスト政権成立以後の人民党の分極化を、一方では農村ファシズムのインパクトによる大衆運動の離脱、他方では《カトリック・アクション》やいわゆるクレリコ・ファシストの部分の離反という二重の契機を軸にして分析している。そして三章では、大衆基盤も《カトリック・アクション》という外的枠組も失い、いわば純化されたキリスト教民主主義の世論政党となった人民党の反ファシズムとヴァチカンへの抵抗の過程を追及している。ここでヴァチカンへの抵抗とは、ヴァチカンがファシスト体制を自由＝民主主義体制にかわるものとして受容し、それと平行してカトリック諸個人の政治的自律性を拒否するという人民党の非宗派性そのものの否定につながる動きを示してきたことに対する抵抗を指している。この抵抗は結局空しく、一方ではファシスト政権、他方ではヴァチカンのはさみうちにあつて、人民党が自然消滅のような形で1926年姿を消してしまう。その過程を描いて筆者は本論文を終えている。

論文審査の結果の要旨

戦後イタリアの現代史学では、ファシズムや共産党の研究と並んで、本論文の対象であるイタリア人民党を含むカトリック運動の研究が精力的に行われてきた。これは、イタリア現代史におけるカトリック運動の重要性を反映したものであり、また、戦後イタリアの政治が、カトリック運動の流れをくむキリスト教民主党を中心として展開されてきたことと密接に関連している。

また、最近のヨーロッパの政治学では、イタリアのキリスト教民主党を含むヨーロッパのキリスト教民主主義諸政党の研究が復活し、それと関連して、その前身である人民党のような政党の研究が盛んになりつつある。このことは、最近のヨーロッパ議会において、EC諸国のキリスト教民主主義政党が一つの院内グループ、ヨーロッパ人民党を結成したこと、さらにそのヨーロッパ議会の選挙が直接選挙という形で行われるようになったことを背景としている。

こうした状況に対して、わが国の学界では、政治学がこれまで一貫してイタリアを周辺視してきたことはいまでもないが、さらにイタリアの現代史研究もファシズムや共産党についてはすでに数多くの成果を発表しているものの、カトリック運動についてはほとんど取上げることはなかった。人民党についても研究も皆無といってよい状態である。

本論文は、こうしたわが国の政治学、イタリア現代史学にまたがる空白部分を補うものであり、わが国の学界がこの論文によって大きな利益をうけることは間違いないと思われる。また本論文は、それだけの内容を十分にもっている。何よりも本論文は、イタリア現代史学の数多くの研究をほとんど余すところなく目を通した上で作成されており、われわれがこの論文を通してイタリア現代史学界の状況を正確に把握することを可能ならしめている。

さらに、この論文の価値を高めるものとして注目すべきことは、筆者が二次的文献に頼るばかりでなく、一次的資料の利用にも努力しているということである。その一次的資料の代表的なものとしては、第一に、ヴァチカンの意向の非公式的な表明と見做されているイエズス会の機関誌 *Civiltà Cattolica* であり、第二は、当時の選挙結果についての政府統計である。とくに後者は、イタリアの学界においても本論文ほどのスケールで取上げられたことはなく、この点が本論文の一つの特色となっている。

人民党のような宗教政党の研究には、大ざっぱに言って二つの方法がある。一つは、宗教政党のかかげる宗教倫理を中心として研究を行う、いわば哲学的な方法であり、もう一つは、政党をとりまく社会との構造的関連の中で、その社会的、政治的機能を追求するという、いわば政治社会学的な方法である。人民党についてのイタリアの研究にもこうした二つの方法が見られ、一方では、現代のキリスト教民主主義の源流という観点から人民党をとらえようとする研究と、他方では、人民党を第一次大戦後の危機に対するカトリシズムの対応としてとらえ、カトリシズムの世界を構成するいろいろな社会層の異なった動きに焦点をあてた研究とが存在する。この二つの方法のうち筆者がとろうとするのは、まず後者であり、筆者の表現を用いれば、一切の「神秘化」を排除しようとする立場である。筆者のこの方法は、全篇にわたって成果をあげ、中でも人民党の組織化過程の叙述、戦後危機の分析

人民党の大衆基盤の解明、三度にわたる選挙の分析などの分野で大きな成功を収めている。

しかし筆者は、この第二の方法にとどまるだけでなく、第一の方法にも関心を寄せている。なぜなら筆者は宗教政党を、一方では、現代社会との構造的関連の中に位置づけながら、他方では、その綱領や政策の源泉が超越的な宗教的真理にあるとも考えているからである。こうした立場から筆者は、その聖なるものと俗なるものとの矛盾に着目し、そこに人民党のダイナミズムの一つの発条を見出している。とくに聖なるものを具体的に体現したヴァチカンの存在しているイタリアでは、この矛盾は、一層深刻な形で存在していた。人民党がファシズム体制の確立過程で崩壊しなければならなかったのも、一つにはこの内部矛盾のためであった。この点に関する筆者の叙述は、大へん興味深いものである。筆者は、この矛盾の主観的な側面をカトリック教徒の「良心問題」と呼び、この「良心問題」にも注目している。しかし、この点については筆者は具体的な解明を行っていない。この点は、宗教政党をとらえるためには最も基本的な問題の一つであるだけに、それがなされていないのはもの足りなさを感じさせる。しかし、それは筆者だけの責任ではなく、イタリア本国の研究者自身の責任でもあろう。そうした研究は、いまだイタリアでも十分な形で存在しないと思われるからである。その限り、この「良心問題」の欠落は、本論文の価値を損うものではない。

このような部分的問題があるにせよ、日本の学界におけるイタリア現代史研究の空白部分を埋め、しかも、イタリア本国の研究水準からみても注目すべき本論文のもつ全体的価値は高く評価されるべきである。

以上の理由により、審査委員は、筆者村上信一郎氏が法学博士の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判定する。